次の古文は、『徒然草』の第五十二段である。読んで、あとの問いに答えなさい。

仁和寺（にんなじ）にある法師、年寄るまで石清水（いわしみず）をａ拝まざりければ、①心（こころう）憂く覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩（かち）より詣（ごくらくじ）でけり。１極楽寺・高良（こうら）などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

（注）仁和寺＝京都にある大きな寺。　石清水＝石清水八幡宮。京都の南、男山の山の上にある神社。　徒歩より＝歩いて。　極楽寺・高良＝男山のふもとにあった寺と神社。　かばかり＝これだけ（のもの）だ。　かたへの人＝仲間。　年ごろ＝長年。　果たしはべりぬ＝果たしました。　聞きしにも過ぎて＝聞いていた以上に。　おはしけれ＝いらっしゃった。　そも＝それにしても。　本意＝本来の目的。　先達＝その道の案内をする人・指導する人。

【石清水八幡宮】京都の南西にある男山という山の上に、石清水八幡宮の本社がある。山のふもとには、極楽寺という寺と、高良という神社があった。お参りに来た人々は、ふもとの寺や神社を拝んでから、山道を登って、山の上の本社にお参りしたのである。石清水八幡宮は、今も京都府八幡市の男山の上にある。

【『徒然草』と兼好法師】『徒然草』は、鎌倉時代の終わりごろに書かれた随筆で、『枕草子』『方丈記』とともに、日本の三大随筆とよばれる。題名は、序段の書き出し「つれづれなるままに」からつけられたといわれる。作者の兼好法師は、朝廷に仕える役人だったが、のちに出家した。吉田兼好ともよばれる。和歌にもすぐれた人で、仁和寺に近い双丘（なみのおか）に住んでいたといわれ、『徒然草』には仁和寺の法師の話がいくつも出てくる。『徒然草』には、季節の移り変わりや人の生き方についての考えのほか、まわりの人々の失敗談や、その道の名人の話が数多く取り上げられている。作者は、さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎてｃ尊くこそおはしけれ。そも、２参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、②ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意（ほい）なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達（せんだち）は③あらまほしきことなり。

（『徒然草』による）

そうした話の最後に、短いことばで自分の感想を書き加えていることが多い。話のおもしろさを味わうだけでなく、作者がその話から何を学び取っているかを読み取ることが大切である。

【兼好の生きた時代】『徒然草』が書かれた鎌倉時代の終わりごろは、やがて幕府がたおれ、朝廷が南と北に分かれて争うようになる、世の中が大きくゆれ動いた時代だった。兼好は、そうした時代の中で、身のまわりの人々の生き方や、うつり変わっていく世の中を静かに見つめ、『徒然草』を書きつづったのである。

【この段の読み方】第一段落では、法師が何をしたか（どこを拝んで、どこへ行かなかったか）を、第二段落では、法師が仲間に語ったことばから、法師がどのような思いこみをしていたかを読み取る。第三段落は、作者の感想である。

【もう一つの仁和寺の話】すぐあとの第五十三段にも、仁和寺の法師が登場する。お祝いの席で酒に酔った法師が、三本足の鼎（かなえ）（金属の器）を頭にかぶって踊り、みなを大笑いさせた。ところが、いざ抜こうとすると、どうしても抜けない。医者にも手のほどこしようがなく、最後は、鼎と首のすき間にわらを差しこんで力いっぱい引っぱり、耳や鼻が欠けながら、やっと抜けたという。調子に乗った行動が、思いもよらない大さわぎになった話である。

問一 a拝まざりければ・b詣でけり・c尊くを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a

b

c

問二 ①心憂く・②ゆかしかりしかど・③あらまほしきの意味として最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　知りたかったが　イ　残念に　ウ　あってほしい　エ　うれしく

①

②

③

問三 2参りたる人ごとに山へ登りしとあるが、山へ登ったのはだれか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　仁和寺の法師　イ　かたへの人　ウ　ほかの参拝者　エ　作者

問四 次のa～cの係りの語に対応する結びの部分を、本文中からそれぞれ四字で抜き出しなさい。

a　何事か　b　神へ参るこそ　c　とぞ

a

b

c

問五 1極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけりとあるが、法師がこのとき石清水八幡宮だと思いこんで拝んだものを、本文中から六字で抜き出しなさい。（「・」も一字に数える）

問六 法師の会話から読み取れる法師の人物像として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　好奇心が強く、わからないことは人にたずねて確かめる人物。

イ　体が弱く、山の上まで登ることをあきらめた人物。

ウ　信心深く、ほかの参拝者に親切に道を教える人物。

エ　思いこみが強く、疑問をもっても人に確かめようとしない人物。

問七 この文章で、作者の感想が書かれている一文の初めの五字を書きなさい。

問八 作者が「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり」と述べたのはなぜか。法師の失敗の内容にふれ、「山の上」「案内」という二つのことばを使って、五十字以上、六十字以内で書きなさい。

解答（答えと短い解き方）

歴史的仮名遣い 標準② 徒然草を読む

本文の読解

問一 a　おがまざりければ　　b　もうでけり　　c　とうとく

「を」→「お」。「まう」は「ア段＋う」なので「もう」。「たふとく」の「たふ」→「とう」。

問二 ①　イ　　②　ア　　③　ウ

①「心憂し」は残念だ・情けない。②「ゆかし」は知りたい・見たい。③「あらまほし」はあってほしい。

問三 ウ

「参りたる人ごとに（お参りに来た人がみな）」とある。法師は「山までは見ず」と言っている。

問四 a　ありけん　　b　本意なれ　　c　言ひける

「か」があるので結びは「〜ん」、「こそ」があるので「本意なれ」、「ぞ」があるので「言ひける」。

問五 極楽寺・高良

法師はふもとの「極楽寺・高良」を拝んで、これだけのものだと思いこんで帰った。

問六 エ

「何事かありけん、ゆかしかりしかど」と思いながら、「神へ参るこそ本意なれ」と思って山へ登らなかった。

問七 少しのこと

最後の「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり」が作者の感想。

問八 （例）法師はふもとの寺や神社を石清水だと思いこみ、山の上の本社を拝まずに帰ったが、案内する人がいれば防げた失敗だったから。

法師は山の上の本社にお参りしていない。案内する人（先達）がいれば、この失敗はしなかった。